

明治文学と英文学

海老池俊治著

海老池俊治著

明治書院

明治文学と英文学

著者略歴

一九一一年、京都市に生まれる。

一九三四年、東京大学文学部イギリス文学科

卒業。

現職 一橋大学社会学部教授。

専攻 イギリス文学（ことに、小説史）・比

較文学（明治文学とイギリス文学）

主著 「第十八世紀英国小説研究」「ディケ

ンズ」「ジェイン・オースティン論考」

ほか訳として、ジョイス「若き日の

芸術家の肖像」、リチャードソン「パ

ミラ」など。

明治文学と英文学

昭和四十三年三月二〇日 初版印刷

昭和四十三年三月二五日 初版発行

¥ 1,800

著者 ◎海老池 俊治

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

印刷者 竹内勝之

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の一六

電話東京（二九四）五三三六（代）

振替口座 東京 四九九一番

まえがき

昭和のはじめごろ、旧制高校に在学中、わたくしは多少とも系統的に明治文学を読みはじめた。数人の友だちと計って「明治文学研究会」というものをつくり、当代の代表的な作家を順々に論評することにした。黙阿弥から花袋あたりまでの作家に、ひとりずつ、当番をきめて、誰かが概要あるいは問題点を報告したあと、みんなで討論し合ったのである。美学者のK君や社会学者のH君がそのときの仲間で、けっこう、熱心になまな文学論を上下したが、わたくし自身は逍遙と漱石について、むきになって、生意気な報告をしたことを覚えてゐる。

大学へ入ってからは、江戸時代の作家の講義を面白がって聞いた。が、けっきょく、英文学を専攻した。そして、大学院の研究題目にイギリス小説史を選んでいらい、その方面の研究に専念してきた。それが、また、改めて明治文学に関心をひかれるようになったのは、敗戦後、東西文化の契合点としてのわが国の立場を、痛感しなければならぬ現実的な要請のためであった。じつは、それが、勤務先一橋大学社会学部で行なう講義の問題意識のひとつであったのである。

わたくしは一橋大学関係の雑誌に、何編か、いわゆる比較文学的な論文を書いた。そして、次第に、はっきり「明治文学と英文学」という課題をみずから設定し、一橋大学以外の雑誌や紀要などにも、同種類の論文を寄稿するようになった。

そういう論文がだいたいまとまったのを機会に、ひと区切りをつけ、それらに手を加えて、首尾をととのえたのが、本

書の内容なのである。したがって、各論文のあいだに、なんらかの意味で、脈絡をつけたつもりではあるが、いうまでもなく、通史としては不備である。重大な項目が欠けている。たとえば、『自由太刀余波鋭鋒』とか透谷とエマーソンなどについての論考である。

しかし、右に述べたように、本書の内容はいわば自然発生的に長い年月を径て出来上がったものであるから、少なくとも、お座なりな間に合わせの議論でなく、問題の解決にならなくとも、その提示の役割は果たしてまいいか、とわたくしは自負しているのである。

本書に収録した論文の原型は、次の通りである——

I

『花柳春話』その他」は『花柳春話』その他」(「一橋論叢」四九卷二号、昭和三八年二月)、

「初期の逍遙」は「スコットの小説」(「一橋論叢」二五卷一号、昭和二六年一月)と、「Shosei-Karagi and English Literature」(“The Annals of the Hirotsubashi Academy”, VII. i. Oct. 1957)。

「美妙の言文一致」は「美妙の言文一致と英文学」(「一橋論叢」三六卷三号、昭和三二年九月)、

「透谷」は「透谷と英文学」(「一橋論叢」四〇卷三号、昭和三三年九月)、

『思出の記』は『思出の記』と『デイヴィッド・コパフィールド』(「一橋論叢」三九卷三号、昭和三三年三月)、

「独歩」は「独歩と英文学」(東京女子大比較文化研究所「比較文化」四号、昭和三三年二月)、

II

「初期の論文・翻訳」は「英文学者漱石」(『夏目漱石必携』学燈社、昭和四二年四月)の一部分、

「講義」は朋文堂版夏目漱石全集七卷解説(昭和四二年六月)、

『吾輩は猫である』は「漱石と英文学」（『日本近代文学』五集、昭和四一年一月）の一部分、

『草枕』は『草枕』と英文学」（『一橋論叢』三七巻五号、昭和三二年五月）、

『虞美人草』は「漱石と英文学 『虞美人草』と『三四郎』の場合」（『一橋大学語学研究室「言語文化」二号、昭和四〇年一月）の前半、

『三四郎』は右論文の後半、

「漱石文学の完成」の四は「『則天去私』と英文学」（『英語青年』一一三巻九号、昭和四二年九月）。

以上の論文を執筆・改訂するに当たって、明治時代の稀文献を恵与し質疑に答えてくださった斎藤勇先生、貴重な図書を貸与し懇切な示教をたまわった柳田泉、本間久雄、塩田良平、笹淵友一、高田瑞穂その他の諸氏に、ここからお礼申し上げたい。なお、とうぜん、処々の図書館のおかげを蒙ったが、とくに、旧漱石蔵書の借覧ばかりでなく、そのあるものの写真版をとることを許してくださった東北大学図書館に、厚く感謝の意を表す。

最後に一言しておきたい。明治の作家のテキストはなるべく、初版本あるいは標準的な校訂本ないし全集本を使うが、漱石のものは岩波の新書版全集によった。かくべつの理由はない。使いなれているためである。

昭和四十三年二月

海老池俊治

目次

I 漱石以前

『花柳春話』その他……………三

一……………三

三……………二

初期の逍遙……………四

一……………二

三……………四

美妙の言文一致……………四

一……………二

三……………四

五……………二

透谷……………三

目次……………五

一	三	一	三
二	七	二	四
三	一〇	二	一〇
四	一四	二	一四
五	一八	二	一八
六	二二	二	二二
七	二六	二	二六
八	三〇	二	三〇
九	三四	二	三四
一〇	三八	二	三八
一一	四二	二	四二
一二	四六	二	四六
一三	五〇	二	五〇
一四	五四	二	五四
一五	五八	二	五八
一六	六二	二	六二
一七	六六	二	六六
一八	七〇	二	七〇
一九	七四	二	七四
二〇	七八	二	七八
二一	八二	二	八二
二二	八六	二	八六
二三	九〇	二	九〇
二四	九四	二	九四
二五	九八	二	九八
二六	一〇二	二	一〇二
二七	一〇六	二	一〇六
二八	一〇九	二	一〇九
二九	一一三	二	一一三
三〇	一一七	二	一一七
三一	一二一	二	一二一
三二	一二五	二	一二五
三三	一二九	二	一二九
三四	一三三	二	一三三
三五	一三七	二	一三七
三六	一四一	二	一四一
三七	一四五	二	一四五
三八	一四九	二	一四九
三九	一五三	二	一五三
四〇	一五七	二	一五七
四一	一六一	二	一六一
四二	一六五	二	一六五
四三	一六九	二	一六九
四四	一七三	二	一七三
四五	一七七	二	一七七
四六	一八一	二	一八一
四七	一八五	二	一八五
四八	一八九	二	一八九
四九	一九三	二	一九三
五〇	一九七	二	一九七
五一	二〇一	二	二〇一
五二	二〇五	二	二〇五
五三	二〇九	二	二〇九
五四	二一三	二	二一三
五五	二一七	二	二一七
五六	二二一	二	二二一
五七	二二五	二	二二五
五八	二二九	二	二二九
五九	二三三	二	二三三
六〇	二三七	二	二三七
六一	二四一	二	二四一
六二	二四五	二	二四五
六三	二四九	二	二四九
六四	二五三	二	二五三
六五	二五七	二	二五七
六六	二六一	二	二六一
六七	二六五	二	二六五
六八	二六九	二	二六九
六九	二七三	二	二七三
七〇	二七七	二	二七七
七一	二八一	二	二八一
七二	二八五	二	二八五
七三	二八九	二	二八九
七四	二九三	二	二九三
七五	二九七	二	二九七
七六	三〇一	二	三〇一
七七	三〇五	二	三〇五
七八	三〇九	二	三〇九
七九	三一三	二	三一三
八〇	三一七	二	三一七
八一	三二一	二	三二一
八二	三二五	二	三二五
八三	三二九	二	三二九
八四	三三三	二	三三三
八五	三三七	二	三三七
八六	三四一	二	三四一
八七	三四五	二	三四五
八八	三四九	二	三四九
八九	三五三	二	三五三
九〇	三五七	二	三五七
九一	三六一	二	三六一
九二	三六五	二	三六五
九三	三六九	二	三六九
九四	三七三	二	三七三
九五	三七七	二	三七七
九六	三八一	二	三八一
九七	三八五	二	三八五
九八	三八九	二	三八九
九九	三九三	二	三九三
一〇〇	三九七	二	三九七

II 漱石

初期の論文・翻訳 一三五

講義 一三三

一 一三三

二 一三三

『吾輩は猫である』 一五五

一 一五五

二 一五五

三 一六四

I
漱
石
以
前

『花柳春話』その他

一

『^{歐洲}花柳春話』四篇とその「附録」は明治十一—十二年に出版された。訳者は丹羽純一郎である。ところで、この訳書の出版目的について、「附録」の末尾に訳者自身が次のようにいつている——

訳者云ク^{ロドリック}牢度倫氏小説二十二巻ヲ著シ細カニ古今ノ人情ヲ探ツテ遠近ノ異俗ヲ記シ一読以テ人世ノ悲歎正邪ヲ詳知スルニ足ラシム而シテ我朝ノ為永春水ノ著ニ係ル梅曆等ノ如ク読者ヲノ徒ラニ痴情ヲ醸発セシムル者ニ非サルナリ且ツ其書概子実跡アル者ニ基キ彼ノ空中ニ樓閣ヲ画キ強ヒテ有ル可カラサルノ人情ヲ写出スルノ類ニ非ラス故ニ其言切ニ其情深シ……^①

また、初篇の冒頭に「題言」を寄せた成島柳北は、次のようにいつている——

固陋学士或ハ云フ。泰西諸国ハ。人々実益ヲ謀リ。実利ヲ説キ。敢テ風流情痴ノ事ヲ問ハスト。是レ極メテ妄誕。余嘗テ航遊一年。親シク看破シ来ルニ。彼我ノ情相契ス。毫モ差異無キナリ。……而シテ彼ノ固陋学士ハ。猶必ス言ハントス。情史世ニ於テ果シテ何ノ用ヲ為スヤ。適マ以テ誘淫啓蕩ノ具トナル而已ト。噫吾徒ノ情人。此ノ情界ニ生レテ。以テ情史ヲ読ム。是レ亦造物主ノ賜ナリ。人豈草木ト同シカラシヤ。花柳亦情有ルカ如シ。人豈花柳ニ如カサル可ケンヤ。……

以上の要旨はこういうことであろう。つまり、ヨーロッパもわが国（江戸時代在来の日本）も、人情の実体は同じことである。だから、人情を物語った作品をそのものとして読み、感銘を受ければよいではないか。ただ、この物語の原本と江戸末期の代表的な〈人情〉本との差異は、後者がいたずらに頹廢的な痴情をあおるのにたいして、前者は実生活の確実な描写である。いい加減な法螺話ではない——要するに、写実性の重視である。もっとも、その〈写実〉

とは文芸学的な嚴密な意味でなく、ごく常識的にいったにすぎない。が、とにかく、ここに、文学体験の、審美的なとともに、知的・道德的な要素を認めようとする志向が示されていることは明らかであろう。

明治十六年に『通俗花柳春話』四編が出版されたが、その「叙」に次のようなことが書いてある――

此書ハ英人李頓氏の著にして英国近世の風俗人情を写して刺す所なく政事家の内密、党派の密情、親子の親、夫婦の愛、貴賤の別、貧富の差其事ハ皆人の視て而して未だ見ざる所を載せ人の知て而して未だ識ざる所を記す而して其言ハ詠諧甘きこと餘蜜の如し是を以て読者終日にして足らず燭を棄て猶飽なし而して余も亦蓋し其一人のみ故に余嘗て英国より還の後此書を訳して以て世に之を公にし以て英史を読む人をして其近世の風俗人情を知しめ且英史の本体を完備ならしめんことを望めり……彼の我国坊間に行はるゝ院本情史の風俗を素り徳義を傷り父子兄弟の団座して見るべからざるの書と同日に論ずるなくんば幸甚ここに、良俗の維持を唱えて、明白な道德的主張を行なっていることは、文芸の〈通俗〉化に伴う自然な成り行きであろう。が、また、一方に、イギリス「近世の風俗人情を知しめ」といい、「英史の本体を完備ならしめ」という主張、すなわち、先進国（開化のモデルケース）の国情を、人間（個人）の姿を通して、具体的に知らせようとする知的主張が、露骨にうたわれていることを、注意してもよいであろう。原『春話』がうちに包んでいた意図のひとつが、その〈通俗〉化によって、一種の教育的姿勢を明らかに示したものだと思われるからである。

ところで、『花柳春話』は大いに受けて、「春」や「話」などの字を題名に取り入れた書物が続出したという。訳者の労は酬いられたといつてよいであろう。しかし、この訳書が、じつさい、洋の東西に通じる〈人情〉をどれだけはっきり語っているであろうか。

それをたしかめるためには、とうぜん、翻訳のしかたという技法上の問題にとどまらず、原本の実体いかん、すなわち、イギリス小説史上の、あるいは、小説論上の意義が、明治十年代初頭のわが国がかかえていた新文化建設の課題に関連づけて、考えられなければならないまい。

『花柳春話』の梗概は次のようである。

マルツラバースという青年がドイツ留学からの帰途、荒野で道に迷って、悪党ダービルの小家にとまり、殺害されそうになるが、ダービルの娘アリスの助けで逃れる。アリスも父の怒りを避けて、逃げ出し、二人が出会う。マルツラバースはアリスの立場に同情し、一軒の家を借りて、彼女とともに住む。甘美な、無垢な、若々しい恋の幻想が実現したような日々である。ところが、マルツラバースの父が危篤になり、彼が家へ帰っているうちに、アリスは父に見つけられて、連れ去られる。そして、マルツラバースとアリスの長い別離が始まる。やがて、マルツラバースはラムリという友人とともに外遊の旅に出る。

以上が初篇全十六章の筋である。そのあと、マルツラバースは著述家になり、集議院の議員になる。外国とイギリスで、恋人（ペンタドフ、フロレンス）ができるが、そのどちらの場合も、彼の恋は実を結ばない。アリスのほうでも、テンブルトンという男（ラムリの叔父）と結婚、夫を失う。最後に、ラムリがパリで殺され、その始末に行つたマルツラバースがアリスに再会する。そこで、第四篇が終わり、「附録」は、マルツラバースとアリスがパリからイギリスへ帰り、めでたく婚礼を取り行なうことを語っている。

右のように、いわゆる才子佳人の奇遇、別離、再会を述べた冒険談であるが、どう考えても、明治初年の日本人にとって、日常的な生活の写実などではない。ただし、異国的な背景は別にして、物語の主旨は男女の愛情と世俗的な活動、人間的相互理解と実効の結合、というよりも、むしろ、その妥協であり、花々しい映像に満ちているが、その経緯は、案外、常識的である。いや、そういういいかたは正確ではあるまい。へ常識的に見えるのは、今日の視点からであらう。

先に引用した「附録」末尾の訳者の言葉に名があがっている春水の『梅曆』、すなわち、江戸在来の〈写実〉的な

物語中で、数人の女に恋されて、彼らの愛情をすべてなまぬるく受け入れ、情痴の日々を送る主人公丹次郎などの対女性態度、そして、また、広く人生態度に比べれば、マルツラバースは清純な初恋を全うする。彼がアリス以外の女に傾ける情熱は、その時々、いちおう、一種の危機意識を生み、彼の人格形成に資することになっている。そればかりでなく、この人物は自己の責任において世間的な活動をする。信頼すべき実家であり、自我、あるいは、個性の自覚を持っているといえるのである。

したがって、この異国的な物語の背景が、当時の日本人の目指した生活形体の範のひとつとなりえたことを思えば、マルツラバースが、彼らに、少なくとも、いわゆる先覚者たちに、理想的人間像と見なされたであらうことは、容易にうかがい知ることができる。

ただ、〈写真〉的技法という点からいえば、訳文の文体は日常生活をそのまま写すにふさわしいものではない。たとえば、初篇第一章に、アリスとダービルの問答が次のようにある――

良々久フシテ低言ニ答テ曰ク兎敢テ盗マス盗マント欲スルヲ幾回ナリシモ未タ之ヲ果サス是レ独リ大翁ノ呵責ニ遇ハンコヲ恐
レテナリ叟曰ク汝少女ノ身ヲ以テ胡為レンコ欲スル此クノ如ク其レ切ナルヤ曰ク他ナシ兎唯タ凍餒ヲ禦カント欲スルノミ……

ただ登場人物の対話ばかりでなく、文体一般がかたい漢文書き下し体である。第一章の冒頭は次のようである――

第一章 獵夫亦能憐ニ弱鳥、
世人休レ疑李下冠

爰ニ説キ起ス話柄ハ市井ヲ距ルコト凡ソ四里許ニシテ一ツノ荒原アリ綠草繁茂、怪石突兀、滿眼荒涼トシテ四顧人声ナク恰モ砂
漠ノ中ヲ行クカ如ク唯悲風ノ颯々ト草蕪ニ戰ダラ聞クノ寂寞ノ慘景云フヘカラス人ヲシテ覺ヘス凜然タラシム四時既ニ
此クノ如シ況ンヤ……

そのように、訳者が漢文書き下し体を取ったのには、もちろん、理由がないわけではなかった。「題言」の筆者成島柳北の戯著『柳橋新誌』初編の執筆が江戸時代であったにもせよ、二編の刊行は明治七年であり（そのとき、引き続いて初編も刊行された）、両編を通じて漢文体が用いられていることが示すように、明治初年の精神態度の表白は、士的教養の表現を踏襲したかぎり、漢文体が最も自然な形式であったのである。そして、それが知的な翻訳に転用された事情は、中村敬宇の有名な『西国立志編』などの文体を見ても、よくわかる。

興味深いことに、表現をへ通俗化したのはずの『通俗花柳春話』は、馬琴調の文体を取っているが、それと比べた場合、原『春話』の文体は、はっきり、教養的・高踏的であったに相違ないのである。で、右に引用した『春話』冒頭に対応する『通俗花柳春話』の文章は次のようである――

第一章 窮鳥厄に遭て獵夫の懐に入り
才子疑を避て李下に冠を正す

都なす街巷を距ること四里許り最と広漠なる荒野あり緑草ハ背丈に生茂り行歩る路さへ絶続に往来ふ人ハ稀にして唯聞ものハ吹風の草葉に戦ぐ音ばかり其荒涼き惨景ハ外に譬んやうぞなし況て……

一一

『花柳春話』の原本は『アーネスト・マルトラヴァース』(Ernest Maltravers, 1837) とその続編『アリス』(Alice, 1838) であり、原著者はリットン男爵ブルワー・リットン (Edward George Earle Lytton, Bulwer-Lytton, Baron Lytton, 1803-73) である。

原本と訳本との筋の異同について、柳田泉氏の詳しい比較考証があるが、だいたい、訳本の三篇の終わりまでは

『マルトラヴァーズ』の第六編の終わりまでに、第四篇はそれ以後及び『アリス』に相当する。が、第四篇は原本の抄略がはなはだしく、『アリス』は「部分的に物語の大意を伝えたのみ」であり、「丹羽氏の抄訳した『アリス』に相当する部分が、私の寓目した流布全集本の原本『アリス』とは種々の点で、かなり大きな相違がある」ばかりでなく、「附録は原本（もしあるとして）に寓目せぬ」という氏の言葉は、いちいち当を得ているようである。

ことに、「附録」に当たる原本の有無は興味深い。『花柳春話』「附録」の「緒言」に、

牟度倫氏嘗テ花柳春話第四篇ヲ草セントシ稿未ダ脱セザルニ偶マ英帝ノ勅命ヲ蒙リ仏国在留ノ公使ニ任ジ彙途ノ前、公務執筆
觚ヲ操ルノ暇ナク暫ラク統稿ヲ廢セシガ其始アリテ終ナキハ徒勞ニ帰セン「ヲ遺憾トシ乃チ急ニ筆ヲ執テ其局ヲ結ビ任ニ赴ク
ノ後チ三月ヲ経テ刻成リ第四篇始メテ世ニ行ハル倫氏巴里府ニ在テ之ヲ一読シ其結末ノ未ダ意ヲ尽シ情ヲ窮メザル所アルヲ以
テ更ニ附録一篇ヲ作り以テ抹刺馬、巫李西ニ再会ノ後段ヲ著シ……

とあるが、右に記したように、『花柳春話』第四篇は、事实上、『アーネスト・マルトラヴァーズ』の一部分（正確にいえば、その第七編第一章——第九編第七章）の訳と、『アリス』の「大意」の合成なのであるから、原本そのものが「刻成り……世ニ行ハ」れたはずがない。ブルワー・リットンの孫リットン伯爵の手になる彼の標準的伝記（The Earl of Lytton, *The Life of Edward Bulwer, First Lord Lytton*, 2 vols, 1913）に、『マルトラヴァーズ』と『アリス』の執筆のころ、すなわち、一八三〇年代後半に、彼がパリ駐在公使に任ぜられたという記述は見当たらない。

柳田氏によれば、「附録」は創作ではないかという。とにかく、その内容は、先にいったように、マルツラバースとアリスがパリからイギリスへ帰り、正式に婚礼をあげることを語ったにすぎず、終わりに原本にない彼らの子供のことを一言しているが、概して、『アリス』の中の記事を取って、説明し、最後に、江戸在来の（読本ふうの）大団円という体裁をととのえたのではないかと思われる。